

説話の言説と王権

——唱導活動を軸に——

序…説話の言説——〈妄語〉と〈実語〉の相剋と反転

中世の無住『雑談集』第二の「妄語得失事」には、仏法の言説における〈妄語〉と〈実語〉の相剋と反転の可能性が論じられている。

佛法ノ中ニ、權實ノ二教此有リ。權教ハ一向妄語也。實教猶自證ノ真空冥寂ノ處ニ望レバ妄語也。無言説之處ニ言説スル故也。然レドモ、方便ノ力ノ無言説ノ處ニ言説ヲ起シ、無身体・現身、説法妄語也。虚似ナレドモ、コレニヨリテ、衆生利益アレバ、慈悲ノ方便不作ト云フ事ナシ。是ノ故ニ、經ニ云、「實語是虚語、以生語見故、妄語是實語、以有利益故取意」。サレバ我妄語セズト云語見也。返妄語也。

愚老ハ随分ノ恵性有テ、利益有バ、教訓等ニ妄語スル事有リ。方便也。若シ利益有ル妄語ナラバ、返テ実語也。⁽¹⁾

ここでは、無住が仏法における權教と實教を〈妄語〉と〈実語〉に対応させて、前者を後者より引き上げている。無住は、両者と

イーサン・ブツシエル

も〈妄語〉であるという考えから、説を始める。実教の言説は無言説のところに直接言説を作り出し、語見という妄想の原因のひとつを生み出す。一方、權教の言説は無言説のところに方便の力によって言説を作り出す。これは權現が無身体のものを方便の力によって現身を作り出すことと似た構造をもっており、無住はこれを「説法妄語」という。彼はそれが虚に似ているという偏見をなくするために、經を引く。そこには、実語は語見を生み出すから虚語であり、逆に、妄語には利益があり、仏意を顯現するから実語であると書かれている。こうして、無住は逆説的な「説法」論を展開する。そして、妄語を使わないという語見自体が逆に妄語であると主張し、自分でも利益があれば、妄語を方便として使うという。このように、無住の説法論では、方便としての〈妄語〉はつねに〈実語〉に反転する力を潜める。

無住がいう「説法妄語」はどのように方便の力によって〈妄語〉を〈実語〉に反転するのか。その母胎となるものは何か。それを解明するために、本論文は、小峯和明の二〇〇二年『説話の言説』に論じられる「〈実語〉と〈妄語〉の説話史」というテー

マをピックアップして、『平家物語』の幕開けに語られる得長寿院供養説話とその形成の場に光をなげかける安居院流『転法輪鈔』〔後白河院〕巻の蓮華王院に関する表白をとり上げる。そして、中世日本における説話の言説や唱導の資料では、唱導活動の役割とその力はどうのように描かれ、構築されたかを検討し、〔妄語〕から〔実語〕への反転の仕掛けやからくりを追究する。

第一節…唱導と説話の言説―〔実語〕説話の確立

『梁高僧伝』巻第十二には、「唱導」における「譬喩因縁」の重要性が論じられる。

唱導者。蓋以宣唱法理開導衆心也。昔佛法初傳。于時齊集止宣唱佛名依文致禮。至中宵疲極。事實啓悟。乃別請宿德昇座説法。或雜序因縁。或傍引譬喩。

つまり、仏法が最初に伝えられた時に、「齋集」という法会で疲れた僧侶に活を入れるために「唱導」が行われ、その中心には「譬喩因縁」がある。

「譬喩因縁」を使って、仏法を説くという概念は『法華経』による。方便品に、

われ、成仏してよりいらい、種々の因縁、種々の譬喩をもつて、衆生を引導し、諸の著を離れしめたり。

そして、方便品の偈にも、

是の如き諸の世尊も、種種の因縁譬喩、無数の方便の力をもつて、諸法の相を演説したまいき。

『法華経』では、「因縁譬喩」は仏法を説く方便として語られ、

その例として有名な「七喩」や過去に法華経を説いた仏に関する「因縁」という物語がある。小峯和明がこれを受けて、「釈迦の言説はすでに説話の言語を先取りしていた」という以上に、説話の言語はこの釈迦の宣言にささえられていた」と指摘する。

日本の院政期における唱導の方法や実体を伝える貴重な資料には、醍醐寺三宝院蔵『転法輪秘伝』がある。そこで、説経（ひろく言えば唱導）に「規」があると述べ、説経の詞を四つの構成要素に区別し説明する。一つ目の詞は、「示現ノ詞」であり、「今日ノ功德・本懐」の有様や儀式に応じて、自分を導師とすることは畏れあり、という内容である。二つ目は、「本文ノ詞」であり、「譬喩因縁」を使わずに「善根ノ鉢」を説くものである。三つ目は、「導師ノ述懐」であり、「功德の先蹤」を挙げ、経文を引いて、譬喩因縁を加えて解釈するものである。四つ目は、「施主分詞」であり、檀越の善根による利益、或は願文に従って檀越の意趣を「微妙ニ尺ス」という内容である。この四つ目の施主の本懐を述べる部分に、説経師の「才」がもっとも発揮され、それが「骨八折」ところであるという。よって、ここにも譬喩因縁が語られる。

譬喩因縁・伝記目録ノ才学、此ノ處ニ相叶タルヲバ、タバウテコ、ニ取出也。

「施主分詞」までの説経は「法実ヲ成スル事ナレバ聞ヲハイタハラズ」だが、ここに至って、「施主ノ耳目ヲオドロカセ、肝心ニ染許ノ才学ヲバコ、振也」という。このように、院政期の唱導で施主をはじめ、聴衆が一番注目すべきところに「譬喩因縁」が語られる。ここで、重要なのはそれが自由に語られるものではな

く、法会場の意味に収束する言説だということである。

〈実語〉という語も『法華經』による。従地湧出品の偈には以下のように釈迦が説きあかす、

我今実語を説く、汝等一心に信ぜよ、我久遠より來、是れ等の衆を教化せり。

つまり、〈実語〉とは仏法の真実を伝える聖なる言説をさす。

小峯和明がこれを受けて、〈実語〉説話を次のように定義づける。

「仏法の典拠をもつ説話、もしくは仏法の權威や正統に裏付けられた説話―具体的には、『日本靈異記』にはじまる『法華驗記』

『日本往生極樂記』など、靈驗記や往生伝といった一連の漢文テキスト、その母胎となる説教や唱導に媒介される話、それが〈実語〉としての説話である。」つまり、ここで、小峯氏は『日本靈異記』などの説話集を〈実語〉説話として位置づけ、その媒体が唱導であると論じている。

〈実語〉としての説話は、唱導と同様、仏の教化・衆生の啓悟など、仏教的な目的が明確である。唱導では「施主分詞」という法会の主催者の本懐とその善根や利益を述べる言語でしめくくられ、『今昔物語集』などの説話集は各話末の批評がほどこされる。

このように、説話は仏法の教理や知識の例証・譬喩として、法会の場に從属し規定される。平安初期九世紀の『東大寺諷誦文稿』、院政期の『百座法談聞書抄』、金沢文庫本『佛教説話集』などの現存する唱導の古い資料には、個々の説話が、教説の趣旨に從つて、施主や聴聞衆や場の状況にあわせて、譬喩因縁として展開される。安居院の唱導指南書『法則集』に、

因縁法門等ヲパスル時、大節ダニタガワザレバ、語何ニ替テ

モ不_レ苦。而本文不_レ違、讚拳ニハ男女之間ニサビシクキコユ。^④

このように〈実語〉の説話は唱導という「譬喩因縁」として機能する。これを先述した無住の「説法妄語」と関連して考えてみると、法会場における唱導は俗なる〈妄語〉説話を聖なる〈実語〉説話に反転する〈宗教活動〉である、というべきだろう。

第二節…説話の〈場〉と王権―法皇による堂供養の説話

俗なる〈妄語〉から聖なる〈実語〉へ反転する唱導活動の母胎は何か。それを示すのが、『平家物語』の諸本、延慶本や長門本、または四部本系の平家族伝抄、語り本系の両足院本、『源平盛衰記』にも含まれる、物語の冒頭に飾る「得長寿院供養説話」である。^⑤

当時の法皇―鳥羽院―の御願による三十三間の堂と一千一体の仏像の供養が行われる。しかし、法会の直前、導師として定められた天台座主は急に辞退し、新しい導師を定めるために十三人の「種姓高貴」の名僧が籤を引くが、いずれもむなし。これを見て、法皇は、「種姓下劣ナリトモ心ニ慈悲アリテ身ニ行徳イミジク天下一番ニ貧シカラム僧」を頼むと決定する。そこに養笠という非人・乞食ひいては濫僧らの身分の表象を着て黒い衣袈裟をかいた老いた賤しい貧僧が現れ、法皇に「愚僧コソ慈悲ト行徳トハ闕テ候ヘドモ、貧窮ノ事ハ日本一ニテ候ヘ、真実ノ御事ニテ候者、可參哉候覽」と、その決定に應えて勤めようと告げる。法皇は、反対する公卿を押し切って、寺院の秩序を超えて、この「無縁貧

道ノ僧」を導師に定める。

供養の日に、貧僧は、日吉山王地主権現の大床の下より現れ、迎えの興を返し、従僧二人と下僧十二人とともに、みすばらしい姿で法会の庭に入る。

導師已^ニ登^リ給^ハバ膝振^ビワナ、キテ法則次第モ前後不覺^ニ見^エタリ。暫^ク有^テ、勸請ノ句ヲハタト打上給^{タリ}ケレバ、三十三間〔の御堂〕ヲヒ^ビキ廻^リ、一千一体ノ御佛モ納受ヲタレ給ラムトゾ目出カリケル。表白実^ニ玉^ヲ吐^キ、説法弥々富楼那ノ弁舌アリ。聴聞集会ノ万人、随喜ノ涙ヲ流シテ無始ノ罪障ヲ濯^キ、見聞覺知ノ道俗ハ、歎喜ノ袖ヲ〔振り〕テ即身ノ菩提ヲ覺^ル。

この導師の説法に、法皇をはじめ、聴衆皆感動した。貧僧が高座より下ったとき、随喜した人々の投じた布施は堂の前に山の如く積み上げられた。聖として迎えられた導師が聴衆のなかを分けて帰ろうとする時に、忽ち空へ飛びあがり、姿を失った。

『平家』の語り手はこの貧僧が地主権現の本地叡山根本中堂の薬師如来、二人の従僧は日光月光の二菩薩、十二人の下僧は薬師の十二神将であつたと示す。願主法皇の信心清浄のあかしとして、このような神仏の威光が現れたという。

このように、得長寿院供養説話の仕組みは一見対立しているようにみえる二つの〈極〉に拠っている。阿部泰郎が論じるごとく、この説話は、「得長寿院の三十三間の大堂と一千一鉢の仏像の法皇による作善の世界と、地主権現床下の貧僧の世界とを対置して、いわば王と非人との対極をなす関係を物語のなかに象つて、むしろ後者こそが前者を祝福するべきものであつたという、一種の、秩序の転倒の過程が現されている。」つまり、この物語は、一方

には、貧僧を導師として定めるといふ法皇の信心清浄を讃嘆し、もう一方には、説法によつて法皇御願による大堂を神仏が現れ、菩提が開かれる聖なる空間として聖化する導師の不思議な力を讃える。しかれば、貧僧という物語の中の人物は導師の王権を聖化する力を表す象徴であつて、物語自体が唱導の聖なる力を讃嘆する譬喩（寓話）である。

この唱導の譬喩には、中世社会の階層の秩序を覆す破壊力を秘めると考えられる。それは、「種姓高貴」の高僧より、「種姓下劣」の貧僧のほうが王を法皇として聖化する力をもつということを目指すからである。つまり、唱導は中世王権に高僧を代表する寺院の体制や公卿を代表する国家の秩序を宙吊りにし、法皇としての権力をより直接に顕現する可能性を与える。もし、王権が、カール・シュミットの『政治神学』にいうように、「例外状態にかんして決定をくだす者をいう」のであれば、唱導は王権の例外状態の決定を可能にする宗教活動である。

唱導は宗教活動としてこのような政治的な機能をもつとすれば、唱導そのものの母胎は何か。得長寿院説話が示すのは、それが導師の生にほかならない。貧僧は、非人として、宗教的政治的な秩序の外に生きており、永久の例外状態のなかで存在している。また、法皇も国家の法や寺院の法を宙吊りにし、自分自身を例外にすると意味で、例外状態の中に生きている。つまり、この二人の生は法的秩序の限界の外に生きていくという点で、構造上に似通つており、いわば、貧僧は法皇の正反対のドッペルゲンガーである。しかし、貧僧の生のほうが法皇の生より極端に例外状態の中にある。このため、貧僧は法皇より王権の可能性を実体化

し、擬人化する。

第三節…唱導と王権

—『転法輪抄』後白河院』巻における堂供養の表白

『平家物語』の幕開けには唱導の譬喩が語られているのは、おそらく『平家』自体が唱導の活動に媒介されたためでもあったろう。そうであれば、そういった譬喩は唱導の実体の場とどのように関係しているのか。その問題を解明するために、ここでは、得長寿院供養説話の形成を法会の場合からあとづけていくことを試みる。

得長寿院供養説話は、ただ『平家物語』の諸本の中に存在するだけではなく、『平家』を離れて法会場で語られていた記録がある。それは室町期の唱導文献『往因類聚抄』に集められる「山門根本中堂薬師奇特事」である。阿部泰郎が既に紹介したように、この資料は得長寿院供養説話の枠組みを借りて、後白河院による蓮華王院三十三間堂の供養説話として説き換えている。これをふまえて、阿部は「得長寿院供養説話の伝承形成の場としては、蓮華王院と後白河院の周辺が第一に想定してくる」と提唱する^⑦。

得長寿院は、史実として、元暦元年（一一八四）の大地震によって崩壊した後に、堂も放置された。それから、『平家物語』の形成期に、院の御願寺院は、得長寿院から既に蓮華王院に移された。三十三間堂の名で知られる蓮華王院は、得長寿院をモデルとしており、その信仰と空間形態を継承し発展させた寺院である。しかも、鳥羽上皇が、大治五年（一一三〇）に平忠盛に命じて千体観

音堂である得長寿院を造営したごとく、後白河法皇が、長寛二年（一一六四）に忠盛の子の清盛に命じて創建したのであって、願主と共に二代にわたる営みと言える。後白河法皇の御所法住寺の広大な一角を占める梁間三十三間桁行五間の巨大な建築は、院家の御堂の頂点であった。創建当初の堂は建長元年（一二四九）に焼失し、今現存するのはその後、後嵯峨法皇による再興された堂である。

この蓮華王院で行われた供養作善が、安居院澄憲の表白などの唱導資料を集めた『転法輪抄』『後白河院』巻における「蓮華王院七日御参籠結願表白」に記されている。内容に応じて試みにA（Eの五段に分けた。（訓読は作者による）

A （千手千眼観世音大悲観世音の徳用）

夫、五濁世に遊び、無畏の徳を施すことは、専ら観自在尊の誓ひにあり、六観音におひて、大慈の名を得たる者は、独り千眼大士の徳に限れり。凡そ、此の菩薩は、多千億の佛に侍て、大清浄の願を発し、智方便を修め習ひて、神通の力を具足せり。正法明の月、太覚の嶺に雲晴れ、清浄光の珠、法界の水に影浮ふ。刀山火湯の苦、菩薩一つに向へば、悉く消滅す。生老病死の患、衆生常に念すれば、漸くに解脱す。名を聞き身を見る者、不空願念す。心に念し口に唱ふる人、勝利必ず円満す。實に是れ、大悲方便の大將、救世利生の規模なる者なり。

B （院の参籠御願の意図と伽藍の様子）

我君、十善の袂襟を凝て、偏に帰依の御誠を抽いて、三業の精誠を潔して、専ら渴仰の御志を尽くす。是れを以て、早く

一の大伽藍を建立して、即ち千体の金容を安置す。即ち是れ、天下希代の御願たり、域中最勝の仁祠たり。黄金の膚、遍く耀く、補陀落山紫摩の光瑞を見しが如し。千眼の眸、互に照す、十方世界の大士の分身を集むに似たり。

C 「建立以来の様子」

建立以来、年月幾ずども、靈驗勝利忽ち域中に囂かし、遂に天下の男女・海内の貴賤、朝には肩を駕して参入し、暮には臂を打ちて退出す。

D 「蓮華王院に営まれる仏事」

方今、今月十八日より参籠御願あり。七日七夜三時に三密の護摩を修し、千返千眼の尊經を讀す。七日の結願に當て、無遮の大会を設く。上三宝より、下孤独に至りて壇度を遍行して悉く糧米を賜ふ。飛禽走獸といへども、悉く恵施を預り、千介万鱗に及ぶまで皆放生を蒙る。旁に悲田・敬田の兩種を分けて、遍に財施・法施の勝因を致す。百種微妙の上供を捧げて、殊に中台の尊に献たり。千灯千坏の供具を備へて、以て諸尊の前に備ふ。御願、既に毎年の御勤たり。善種、歳迎ふごとに勤行せしむ御者なり。

E 「結願と千手千眼觀世音への帰依」

伏して願はく、千手千眼大慈大悲、悉知悉見、哀受哀納、万歳の宝算を増し、二世の悉地を満たし奉り御さむ。三宝業の御勤、千眼の照見、陰無し。十善の玉体、千手の護持、馮あり者かな。

ここで特に注目すべきは、C段にみえる「天下の男女・海内の貴賤」が蓮華王院に参入するという記述と、D段にみえる「無遮

の大会」を設けて下賤の者にまで施行を賜っているという記述である。さらに、D段に鳥獸や鱗までも資糧放生を施し、悲田・敬田の二種にそれぞれ財施・法施を尽くしたとある。阿部がこれを受けて、中世の安居院が洛中における非人・乞食等への施行・供養を運営・管理する機関として存在していたと指摘し、乞者非人への施しも行われていたと推測する。このような非人への施行がこの機会に限って行われたわけではないが、それを導師が強調していることは注目すべきであろう。

E段にみえる王の「玉体」を「護持」する千手の大悲は、後白河院の千手帰依を強調するが、そのテーマは院が死を間近に感じようになつた文治二年（一一八五）三月に始められた蓮華王院における「院七日御逆修結願表白」にさらに展開する。阿部の分析に随つて、その中で特に二カ所を注目したい。他の文章を省略して、内容に應じて試みにA～Cの三段に分けた。

A 「院の蓮華王院本尊千手千眼への帰依」

……今度御願、殊に観心有り。菩薩照見し給ふらむ。千手千眼の尊は多年御本尊なり。持念、既に四十七年に及び、等身尊容造る者、一千体なり。之を建立し安置する伽藍は、三十五間なり。参籠し御す、幾日数ぞ。臨幸御す、幾度数ぞ。

或は靈仏、或は明神。本尊、若し千眼像たらば、観心留まり、帰依を致す。本地、若し千手尊たらば、神襟染め、渴仰抽き御す。毎月十八日、必ず卅三卷經王を転読す。定めて一千反神咒念し御す。一伝本尊靈像御し以来、毎日勤行し、全く怠ること無し。一馮大悲本誓以来、渴仰、敢て改まること無し。定めて知るべし、千眼照見、每眼光放ち、照し奉る。千手護

持、毎手臂申し、摩奉り給ひ御すらむ。

B〔院の蓮華王院本尊千手千眼への勤行〕

方今、逆修御願、其の懇志前々よりも深し。是れ恐らく、最後修善たらむことを。造立御願、其の信力年々よりも勝る。

定て必ず大悲護念垂れ御すべし。娑婆世界、施無畏聖者なり。

五濁惡世、大慈悲の至なり。道俗多く此の菩薩に歸し、男女併せて其の誓願を馮む。しかれば、我君がごとく御薰修は、

聞かず、見ず、比無し、類無し。転経数は、八万三千五百余卷。神咒反数は、四十六万二千余反。造立形像一千余体。修

護摩修行法御事、知らざる日数、記さざる数量。今当、貴体不豫 なる。宝算危臨み有り、誰菩薩先來る。何れ大聖三臨

み給ふべき。菩薩、自ら節知り、更に啓白言待つべからず。

大士、早く時鑒み、何れ啓白詞を待つべきかな……

C〔千手千眼觀世音の感応靈驗〕

感応靈驗

永曆元年十月七日、御熊野詣時、護摩修せしめ御す間、壇上婆耨仙現れ給ふことを見奉り御す云々。

應保二年六月八日、如法千手護摩三七箇の間、如法懸幡燃灯、勤行せしめ御す間、御本尊護摩壇前起きず、千手陀羅尼經一

千巻転読す。結願の時に臨み、故前大僧正覺讀、夢見らく、

「院、生身千手觀音をはします。何に今まで参りて拝み奉らざるか」と語る人あり。即ち、夢中に法住寺殿南面参る（法住寺殿）

法皇、御白衣にて御小袖着、知許出会ひ御し、仰ぎて云はく、

『彼は何事に参せしめたるか。』と尋ねしむ。御答え申してはいはく、『御所、生身千手觀世音御す由、人語り候ふ。仍、

拝み奉る為参る所なり。』咲せしめ御す。覺讀、退出せむと欲する時、御小袖褰げ、見奉る御手、以て外長見しめ御し、拝み奉りし。本のごとく御衣を引き塞ぎ奉りぬ。仰ぎて云はく、『ゆ、しく宿縁有りける者かな、海岸へ往かむ時は、必ず相具すべきなり』云々。

まず、A段に後白河院の蓮華王院本尊である千手千眼觀世音への帰依とその勤行が語られ、B段の「本尊由来」に院の若いころからの信仰の發生を確認し、ついでC段の「感応靈驗」でこの信心修行に応じて示された驗しを取りあげる。その感応靈驗は以下の通りである。應保二年（一一六一）に、恐らくは蓮華王院本尊宝前における千手護摩修法結願の時に、大僧正覺讀の夢に、院が「生身ノ千手觀音ニテヲハシマス」ということが示されたという。その後「何故今までそれと悟って参り拝まなかつたのか」とある人に責められて、そこで覺讀は夢の中で御所へ参って院と対面する。院は白衣に小袖ばかりの略装で出会い、彼の見参の故を問う。覺讀がその由を申し上げると、院はただ微笑むのみであった。しかし、覺讀が退出するとき、院は小袖をかかえて御手を見せた。それは長く見えるようであり、千手の徴である。ものように衣を引いて、院は彼に「ゆ、しく宿縁有りける者かな、海岸へ往かむ時は、必ず相具すべき也」と仰せられた。つまり、覺讀がなくなつたら、必ず補陀落の岸辺へ伴う、と院が約束した。このように、C段の感応靈驗譚は演劇的で説話的な夢想を語ることで、院を生身千手まで聖化する。

安居院流『転法輪抄』の「後白河院」卷の蓮華王院に関する表白は院政期における唱導活動と王権を考える上で示唆深い。「院

七日御逆修結願表白」のC段が示すように、唱導でいう「譬喩因縁」といういきいきとした物語が法会場で語られ、そして、「蓮華王院七日御參籠結願表白」が示すように、そのような演技的な儀礼パフォーマンスが「無遮ノ大会」で天下の男女貴賤に積極的のアピールできるものであった。それから、また後者の表白が示すように、資糧放生や非人・乞食等への施行などの特別な事業が実施され、得長寿院説話で描かれるごとく、唱導は国家の法や寺院の法を宙吊りにし、例外状態を作り、それが院の法皇としての聖なる王権をより直接的に顕現する活動の役割を果たしていた。

この蓮華王院に関する表白が伝える法会の場合は、得長寿院供養説話の形成に関与したにちがいない。だが、得長寿院供養説話で描かれる場はそういった実体的な場とは異なり、語り手と聞き手によって醸し出される時空であり、物語の中に存在する虚構の〈場〉である。また無住の発想に戻ってみると、虚構の〈場〉と実体の場は、妄語と実語と同様、必ずしも絶対的に対立するとは限らない。導師の立場からみれば、仏法になつてさえいれば、譬喩因縁などの虚構の物語は捏造してもかまわない。これが無住の発想の中心にある。

凡、此物語ニ記スル事ニテ、慥ニ間置タル事ナル。コトニ法功能、仏神ノ威力、無私事ナレバ、不聞事ヲバ不申。三宝御知見アルベシ。ユメユメ空キゴト虚誕ナシ。大方ハタトヒ事ナリトモ、道理ニモ不背、仏法ニモアハバ、譬喩ヲ造出シテモ、法義ヲ顕ス事ナレバ、過アルマジキ事也。其上是レハ皆慥ナリ。当世ノ事ヲ多ク記スル故ニ、其名ヲ隠シ、

委クカカヌバカリナリ。若シカラヌ事ニハ、少々名ヲモ記ナリ。 (『沙石集』梵舜本卷七・二十四)

無住の発想では、譬喩・たとえは虚構(妄語)と実体(実語)の相即を可能にする修辭である。この発想を借りてみると、得長寿院供養説話という唱導の譬喩は虚構の場しか描かないとしても、それが、導師からみる唱導の真実を伝える可能性をもつ、といえる。

むすび…唱導という聖なる潜勢力を実現する〈宗教活動〉

無住の説法論が示すように、中世日本において説法(ひろく言えは唱導)は物語などの〈妄語〉を譬喩因縁などの〈実語〉へ反転する〈宗教活動〉であった。無住の言葉を借りていえば、それが方便の力にはかならない。この力によって説話の言説は唱導を媒介にはぐくまれているのである。

では、説話をはぐくむ唱導活動自体は何を媒介にはぐくまれたか。いいかえれば、唱導の方便の力は何を母胎としたか。この問題を考えるために、本論では『平家物語』の幕開けに語られる「得長寿院供養説話」を参照した。ここでは、現身を起こす方便の力は貧僧という排除された生を媒介に現れた。この生は、法皇と同様、国家の法からも寺院の法からも、自らを例外として排除した時をはじめて成り立つものである。つまり、法皇と貧僧は、同一の構造をもつ存在であり、互いに相関関係にある正反対の二つの〈極〉を提示する。この二つの〈極〉こそが、唱導活動の母胎である。さらに、虚構の場を描く「得長寿院供養説話」にも、実

体の場を伝える『転法輪鈔』の蓮華王院の表白にも、唱導はその相対する〈極〉をつなげてかたどってみせる運動として機能している。ここから次のことが導きだせる。俗なる存在である王と非人の生は、聖なる潜勢力^{デユナミス}をもち、それを聖化し実現する力、いわば、現勢力^{ポテンチ}が唱導にほかならない。さらに論を展開すれば、唱導は、中世日本において、その二つの極端な潜勢力を母胎として、聖なる〈実語〉説話を生み出す〈宗教活動〉として役割を果たしていた、と言ってもよからう。

注

- (1) 山田昭全、三木紀人校注『雑談集』(「中世の文学」三弥井書店、一九七三年)、八五～八六頁。
- (2) 馬淵和夫・田口和夫「翻刻・醍醐寺蔵『転法輪秘伝(説法秘条)』」(『醍醐寺文化財研究所研究紀要』18、二〇〇〇年)。
- (3) 小峯和明『説話の言説―中世の表現と歴史叙述』(森話社、二〇〇二年)、三八頁。
- (4) 阿部泰郎・山崎誠『法儀表白集』(臨川書店、二〇〇五年)。
- (5) 以下の得長寿院説話の本文の引用は『延慶本平家物語全釈』(汲古書院、二〇〇五年)。
- (6) 阿部泰郎「唱導と王権―得長寿院供養説話をめぐりて」(「伝承の古層」、一九九一年)、二二二頁。
- (7) 注(6) 阿部論文参照、二三七頁。
- (8) 永井義憲・清水宥聖編『安居院唱導集 上巻』(角川書店、一九七二年)、二二三～二二四頁。
- (9) 注(8) 参照、二四六～二四七頁。

(10) Sovereign Power

王権と剥き出しの生、そして、その潜勢力と現勢力との関係について、ジオルジョ・アガンベン著、高桑和巳訳『ホモ・サケル ―主権権力と剥き出しの生』(以文社、二〇〇三年)に参照。

(イーサン・ブッシエル ハーバード大学院生)